

令和2年2月19日(水)の中日新聞に、鈴鹿の加佐登(かさど)神社に天皇陛下の即位を記念して「神宮遥拝所」が完成したとの記事が掲載された。その中に、三重は伊勢神宮に近いので遥拝所がある神社は多くないとのコメントがあった。日頃は、余り気かけないが、土清さんの谷川神社には遥拝所があったなど境内を覗いてみた。南の角に、基台も含めて高さ2m 余りの石柱で「遥拝所」があった。神宮とは銘打っていないが方角からすると伊勢神宮を拝することになる。右側面には「奉祝皇紀二千六百年」とあり、昭和15年の建立らしい。裏面には「山田庄次郎寄附」とある。

遥拝所の傍には、1m に満たない鉄製の角柱があり、ほとんど消えかけているが、「史跡 谷川土清墓」と読める。もう一面には「文化財をたいせつに」とある。もとは、福蔵寺の墓地の方に立てられていたのだろう。

他に何かあるだろうかと振り返ると、手水舎の右に高さ70cm ほどのおむすび型の自然石でできた石碑があり、石碑の左右には松の若木が2本立っていた。ひっそりとしているので、余り人の目を引かない。ともかく石碑に刻まれた文字を読むと、「さんも末川(まつ)」とある。設置年や由来はどうなっているのかと石碑の周りを見てみると、裏に歌らしきものがあった。

大きくて深く彫られた文字は簡単に読めるが、小さくて細い文字は風化もあって容易には判読できない。デジタルカメラで撮影してパソコンで処理することにしたが、横から光がさした方が読み易くなるため時間を変えて撮影したり、懐中電灯を使ったりしたが、余りうまくゆかなかった。石の模様が邪魔をしてどうしても判読を困難にするのだ。結局、厚目の書道用紙を碑面に押し当て指で圧力をかけながら文字面をなぞるという墨を使用しない拓本になった。墨を使う方法に比べて二度手間になるが、これだと粘土などを使う方法に比べても石碑を汚さずに済み、家に帰ってからゆっくりと解読することができた。部屋の片隅に凹凸のできた用紙をぶら下げ、それを斜光で陰影を浮かせ上げて撮影すると、石の斑点模様など余分な情報がなくなり解読が楽になった。

最初から簡単に判読できた大きい文字というのは、「古き世の」、「押加部」、「末川(まつ)」、「名」、「残して」くらいで、そのうち「古き世の」と「押加部」の2つから、「押加部」の地にあつて土清と因縁のある「古世子神社」のことをうたつたものかと漠然と思っていたが、解読の結果や他の資料からするとちょっと違っていた。

【くずし字解読辞典】やインターネットでは、「AI手書きくずし字検索」www.ai-kuzushiji.net などを利用しての解読結果は以下のとおりになった。

古き世の 多免(ため)しを此處耳(ここに) 押加部や
ミ毛(みも)との末川(まつ)の 名越者(をば)残して

歌では「押し込めて」の掛詞になっている地名の押加部からも何かわかればと地名辞典を覗いてみた。『角川地名大辞典』(JLogos 所収のオンライン版)の「刑部村(近世)」の項には、この地(刑部、押加部)の神社、古世子明神社とともに福蔵寺についても記述があり、もとは安濃川寄りにあつて、津城拡張にあたり現在地に移転したとのこと。山門の前に松の木があり山門松と呼んでいたが、これが訛ってその付近が通称「三本松」と呼ばれるようになったとのこと。今も、三本松橋、バス停「三本松」にその名前が残っている。現在の福蔵寺との間に大きな道路が通っているため、同じ町とは思えないが、どちらも押加部町である。

石碑の歌にある「みもとのまつ」と、この地名大辞典にある「三本松」からすると、石碑の歌は古世子明神についてのものではなく、福蔵寺の山門前に植えられた松に由来する土地のことを歌つたものであることになる。福蔵寺の現在地への移転後、三本松と呼ばれた古き世の例しを後世に伝えるため、かつての通称「三本松」の地に石碑は建立され、その後、また時期が経ってこの地に移されたものとみえる。

石碑の左右に松が植えられている訳も納得がいった。また、目視だけで解読したおもて面の文字を「さんもまつ」と読んだのは間違いで、「さん本まつ」が正しいのではと考え直した。『五體字類』の変体仮名「ほ」を見てみると、藤原佐理による「本」の字の終筆部のカギ状になった点を取ると平仮名の「も」になる。石碑表面の該当する部分にカギ状になったところがあるか、あらためて裏面の時と同じように書道用紙を当てて指でさぐってみた。もしあれば、「も」ではなく「本」ということになる。

すると、該当箇所にはわずかにへこみがあり、白く石化した表面を爪を立てて少し強く擦ると、ほろほろと剥がれてきたので、泥の一部を掻き出すことができた。カギ状の点となるところに粘土状の土が埋まっていたのだ。何時、誰が埋めたのかかわからないが、「本」の字であることが確認できた。

本来の地から移されてきて、ちょっと肩身が狭そうで目立たない「さん本まつ」の石碑であったが、おもて面だけでも白い塗料などで刻字に墨入れすることで、少しは見栄えのする石碑になるのではないかと思った次第である。

(はぎのみつあき)



歳旦祭に参列して



奥田 榮子

今年初めてご縁により谷川神社の歳旦祭に参列させていただきました。元旦の心引き締まる思いで神社に到着すると、すでに何人かの皆さんが三々五々集まって来て和やかに新年のご挨拶を交わしていらっしゃいました。ガイドでお世話になっている奉賛会の方々や新町小学校の校長先生のお顔が見えて心強く思いました。

10時の開式を待つ境内に太陽の光が暖かく射し、今年は何か良いことが待っているかのような期待感がふくらみました。境内に並べられた椅子に指定された順に並び開式を待ちました。

奉賛会のみなさんのご奉仕により準備万端整えていただき、紅白のお餅も用意されていて有難く頂戴してきました。国魂神社の宮司さんの祝詞で式が進み、テープの雅楽の流れるなか、土清の会を代表して玉串を捧げました。宮司さんの丁寧な所作を真近かに拝見しながら敬虔な思いに浸りました。土清さんがとても身近に感じられ、良い経験をさせていただいたと感謝のひとつでした。境内での式もあまり寒さを感じる事なく無事にお参りさせていただけた喜びで胸が暖かくなりました。

昨年の土清さんのご命日の10月10日、福蔵寺でご住職(鈴鹿のお寺と兼務)と安濃のお寺のご住職のお二人により法要が執り行われました。私にとっては初めての法要で池村代表、別所副代表、山越会計のみなさんとお参りさせていただきました。本堂での手厚い法要のあと、やぶ蚊の飛び回るなか、ご丁寧にお墓勤めもさせていただきました。法要のあと、近々にご本尊の薬師如来坐像を拝ませさせていただきました。黒々とどっしりとしたお像で眼を見開きわれらをじっとご覧になっているようで少し恐れをいただきました。医者であった土清さんの菩提寺に相応しいご本尊だとの思いを強くしました。その後、膝を突き合わせあれこれお話を聞かせていただきました。近々庫裏の襖の下張りを調べたいので協力して欲しいとお願いされました。

この様に神社の奉賛会の皆様や福蔵寺のご住職をはじめみなさんの土清さんに対する認識とご理解が少しずつ深まり、われわれ土清の会の努力が実ってきているようで嬉しく思うこの頃です。

(おくだ・えいこ)